



軸に立つ

どこから世界を見るかを、引き受ける。

経験は起こる。
だが、それがどこに触れるかは決まっていない。

触れた位置が、
その後のすべてを決めている。

経験が人を変える、
という言葉は、どこか都合がいい。

出来事の側に原因を置いておけば、
自分の立ち位置を引き受けずに済むからだ。

だが、同じ経験を通過しても、
人は同じ場所には残らない。

ある者は形を失い、
ある者はその場に馴染み、
ある者は、何も持ち帰らない。

経験は何も決めていない。

どこでそれに触れていたか。
それだけが、残っている。

人は場に立つとき、
すでにどこかに立っている。

その位置は、言葉にはならない。
だが、すべての選択より先にある。

軸が曖昧なまま立てば、
場は内側まで入り込んでくる。

評価は重さを持ち、
視線は方向を変え、
気配は、内側の位置を書き換える。

そのとき、人は経験しているのではない。
位置を失っている。

一方で、
位置を持ったまま立つ者は、
何も防がない。

出来事は通過し、
変化は起きる。

だが、どこから見ているかは、動かない。

軸とは、強さではない。

立っている場所を、
他に預けていない状態のことだ。

軸があると、変わらないわけではない。

むしろ、変化は起き続ける。

だがそれは、
外側に引き寄せられた変化ではなく、
同じ位置から見続けた結果として起こる。

場は変わり、
関係は移ろい、
出来事は積み重なる。

それでも、
どこから見ているかが変わらないとき、

変化は崩れにならない。

経験は、人をつくっていない。

ただ、
すでに立っている場所を、
露出させているだけだ。

A painting of a mountain peak with a large yellow sun or moon behind it, and a winding path leading up the mountain. The scene is set in a forest with tall evergreen trees. The path is a bright yellow-orange color, winding through the dark green foliage. The mountain peak is a mix of purple and blue, with a sharp, jagged top. The sun or moon is a large, bright yellow circle with a soft, glowing aura. The overall mood is mysterious and dramatic.

場に立つたび、
位置が露わになる。

試されているのではない。

どこから見ているかが、
残ってしまうだけだ。



Edition — 価値観の航路
別景：軸に立つ

著者：美学思想家 古川玲奈
発行：Raffiné
2026